



芥川龍之介 著

河童
或阿呆の一生

A4用紙で印刷すると、実寸サイズをご確認いただけます。
※倍率100%の場合

目次

河童……………	5
或阿呆の一生……………	101
齒車……………	147

河童か
つ
ぽ

これはある精神病院の患者、——第二十三号がだれにでもしゃべる話である。彼はもう三十を越しているであろう。が、一見したところはいかにも若々しい狂人である。彼の半生の経験は、——いや、そんなことはどうでもよい。彼はただじつと両膝をかかえ、時々窓の外へ目をやりながら、（鉄格子をはめた窓の外には枯れ葉さえ見えない檜の木が一本、雪曇りの空に枝を張っていた。）院長のS博士や僕を相手に長々とこの話をしゃべりつづけた。もつとも身ぶりはしなかつたわけではない。彼はたとえば「驚いた」と言う時には急に顔をのけぞらせたりした。……

僕是这样い彼の話をかなり正確に写したつもりである。もしまただれか僕の筆記に飽き足りない人があるとすれば、東京市外××村のS精神病院を尋ねてみるがよい。年よりも若い第二十三号はまず丁寧（ていねい）に頭を下げ、蒲団（ふとん）のない椅子（いす）を指さすであろう。それから憂鬱（ゆううつ）な微笑を浮かべ、静かにこの話を繰り返すであろう。最後に、——僕はこの話

を終わった時の彼の顔色を覚えている。彼は最後に身を起こすが早いか、たちまち拳骨（げんこつ）をふりまわしながら、だれにでもこう怒鳴（どな）りつけるであろう。——「出て行け！ この悪党（あくだう）めが！ 貴様（あなた）も莫迦（ばか）な、嫉妬（しつと）深い、猥褻（わいせつ）な、ずうずうしい、うぬぼれきつた、残酷（ざんこく）な、虫のいい動物（どうぶつ）なんだろう。出ていけ！ この悪党（あくだう）めが！」

一

7 河童

三年前（さんねんまえ）の夏のことです。僕は人並みにリュック・サックを背負い、あの上高地（かみこうち）の温泉宿（やど）から穂高山（ほたかやま）へ登ろうとしました。穂高山へ登るのには御承知（おんじょうち）のとおり梓川（あすさがわ）をさかのぼるほかはありません。僕は前に穂高山（ほたかやま）はもちろん、槍ヶ岳（やりたけ）にも登っていましたから、朝霧（あさぎり）の下りた梓川（あすさがわ）の谷を案内者（案内者）もつれずに登ってゆきました。朝霧（あさぎり）の下りた梓川（あすさがわ）の谷を——しかしその霧（きり）はいつまでたつても晴（は）れる景色（けしき）は見（み）えません。のみならずかえって深（ふか）くなるのです。僕は一時間（いちじかん）ばかり歩（あ）いた後（のち）、一度（いちど）は上高地（かみこうち）の温泉宿（やど）へ引き返（かえ）すことにしようか

と思いましたが。けれども上高地へ引き返すにしても、とにかく霧の晴れるのを待った上にしなければなりません。といって霧は一刻ごとにずんずん深くなるばかりなのです。「ええ、いつそ登ってしまえ。」——僕はこう考えましたから、梓川の谷を離れないように熊笹くまざさの中を分けてゆきました。

しかし僕の目をさえぎるものはやはり深い霧ばかりです。もつとも時々霧の中から太い毛生ふな櫛もみや椏たの枝が青あおと葉を垂らしたのも見えなかつたわけではありません。それからまた放牧の馬や牛も突然僕の前へ顔を出しました。けれどもそれらは見えたと思うと、たちまち濛々もうもうとした霧の中に隠れてしまうのです。そのうちに足もくたびれてくれれば、腹もだんだん減りはじめる、——おまけに霧にぬれ透とおつた登山服や毛布なども並みたいていの重さではありません。僕はとうとう我がを折りましたから、岩にせかされている水の音をたよりに梓川の谷へ下おりることにしました。

僕は水ぎわの岩に腰かけ、とりあえず食事にとりかかりました。コオンド・ビイフの罐かんを切つたり、枯れ枝を集めて火をつけたり、——そんなことをしているうちにかれこ

れ十分はたつたでしょう。その間あいだにどこまでも意地の悪い霧はいつかほのぼのと晴れかかりました。僕はパンをかじりながら、ちよつと腕時計どけいをのぞいてみました。時刻はもう一時二十分過ぎです。が、それよりも驚いたのは何か気味の悪い顔が一つ、円まるい腕時計ガラスの硝子ガラスの上へちらりと影を落としたことです。僕は驚いてふり返りました。すると、——僕が河童かっぱというものを見たのは実にこの時がはじめてだったので。僕の後ろにある岩の上には画えにあるとおりの河童が一匹、片手は白樺しろかばの幹かかを抱え、片手は目の上にかざしたなり、珍めづしそうに僕を見おろしていました。

僕は呆あつ気けにとられたまま、しばらくは身動きもせずにいきました。河童もやはり驚いたとみえ、目の上の手さえ動かしません。そのうちに僕は飛び立つが早いか、岩の上の河童へおどりかかりました。同時にまた河童も逃げ出しました。いや、おそらくは逃げ出したのでしょう。実はひらりと身をかわしたと思うと、たちまちどこかへ消えてしまったのです。僕はいよいよ驚きながら、熊笹くまざさの中を見まわしました。すると河童は逃げ腰をしたなり、二三メートル隔へつた向こうに僕を振り返って見ているのです。それは